論文審査の結果の要旨

氏名：小　林　直　哉
専攻分野の名称：博士（医学）
論文題名：単発肝細胞癌における切除断端陰性かつ切除断端距離 1mm 未満症例の検討

審査委員：（主 査）　　教授　　後藤田　卓　志

（副 査）　　教授　　櫻　井　裕　幸　　教授　　天　野　康　雄

教授　　増　田　しのぶ

本論文タイトルは「単発肝細胞癌における切除断端陰性かつ切除距離 1ｍｍ未満症例の検討」である。切除断端距離<1mm(MR 群)と 1mm≤(non-MR 群)とを無再発および全生存で比較検討することで、切除断端距離の限界について検討した。専門家以外の理解を促進するために図説を丁寧に行い完成度が高く臨床的に有用な論文である。

悪性腫瘍に対する手術における至適な切除断端は、根治性の面から十分な距離の確保が望ましい。一方で、安全性や機能温存の面からは切除断端距離を最小限にすることも求められている。肝細胞癌では、殆どの背景に慢性肝炎や肝硬変を有しており、切除距離の確保は肝予備能にも影響される。肝細胞癌は被膜に覆われており、膨張性発育が特徴であり切除断端距離の確保は他臓器の癌より少ないとされている。しかし、肝細胞癌肝切除における至適な切除断端距離は明らかではない。

本研究は、肝細胞癌肝切除において切除断端距離が予後に寄与するかを明らかにすることを目的とした。対象は、2001 年から 2012 年までに施行された単発単結節性肝細胞癌の初回治療 454 例である。術後病理にて切除断端距離を MR 群（90 例）と non-MR 群（364 例)に分類し比較した。

手術因子では、MR 群で有意に腫瘍径が大きく術中出血量が多く、系統的切除の割合が低かった。長期生存および無再発生存は MR 群で有意に不良であったが、全生存では両群に有意差を認めなかった。Cox 比例ハザードモデルによる多変量解析では、切除断端距離<1mm は全生存および無再発生存ともに独立した予後規定因子ではなかった。傾向スコア解析で背景因子を調整後、全生存および無再発生存に有意差を認めなかった。また、再発形式についても肝外、肝内ともに両群で有意差を認めなかった。

後向き研究であることから腫瘍径や手術法において MR 群と non-MR 群に差を認めたが、傾向スコアで調整した結果、切除断端陰性かつ切除断端距離<1mm であっても無再発生存、全生存および再発形式において切除断端距離 1mm≤例と差を認めなかった。

今回の研究は、単発単結節型肝細胞癌に対する肝切除において切除断端は陰性であれば断端距離は<1mm も許容され得ることを示し肝予備能の観点から臨床的に有用な報告である。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以　　上

令和　　2 年　2 月 17 日